

聖書: エステル記4章12～17節

説教: このような時のために

はじめに

いまからおよそ二千五百年前、ペルシャ帝国に住んでいたエステルは王妃に選ばれて王宮に迎えられました。それから五年が過ぎたとき、大きな事件が起きます。クセルクセス王の側近であるハマナが、モルデカイに対する個人的な恨みからペルシャ帝国に在住するユダヤ人を虐殺するために、法令を全国に発布したのです。これを知ったモルデカイは、灰をかぶり、粗布をまとって王の門のところに来て大声で激しく叫びます。いったい何事が起きたのかとエステルは、宦官のハタクを送って詳しく事情を聞く。そうするとモルデカイはエステルにこう言った。「あなたは王のところに行って、自分の民族のために王からのあわれみを乞い求めなさい。」エステルは自分の育ての親であり信仰の先輩でもあるモルデカイに逆らったことはほとんどなかったはずですが。ところがこの時エステルは、「王の中庭に勝手に入ろうとする者は、たとえ王妃といえども殺されるという法令があります」と言って、断った。これが前回までのあらすじです。

これに対してモルデカイはどんなことをエステルに語ったのか、エステルはどう応答したのか、そこにどのような神のみこころが示されているのか。ともに見てまいります。

1 モルデカイ

1) もし沈黙を守るなら

エステルからの返事を聞いてモルデカイはこう語りました。13, 14節。「あなたは、すべてのユダヤ人から離れて王宮にいるので助かるだろう、と考えてはいけない。もし、あなたがこのようなときに沈黙を守るなら、別のところから助けと救いがユダヤ人のために起こるだろう。しかし、あなたも、あなたの父の家も滅びるだろう。あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、このような時のためかもしれない。」

モルデカイは二つのことを語っています。一つ目。「すべてのユダヤ人から離れて王宮にいるので。」あなたはこれまで五年間、王妃として王宮に住むうちに王宮のしきたりや風習にどっぷりつきり、自分の属する民族がユダヤ人であることを忘れてしまったのではないか。王宮の外のユダヤ人

と自分は関係がないと思い込んでいるのなら大間違い。エステル、目を覚ましなさい。

2) もしかすると、このような時のためかもしれない

二つ目。それでももしあなたが、自分は関係がないと思って何もせず、沈黙を守ろうとするならどうなるか。「あなたも、あなたの父の家も滅びるだろう。」「あなたも、あなたの父の家も滅びるだろう。」なんとしてでもエステルを王のところに行かせるために、脅かしているように聞こえます。もちろん、そんなはずはない。モルデカイはこの五年間、ずっと祈り求めてきました。エステルが、多くの女性の中から一人特別に選ばれて王妃となった理由は何か。ずっと答えは与えられなかったけれど、いま大変な苦難が起きてみると、パズルのピースがぴたりとつながるように、はつきりと見えてきた。エステルが王妃となったのは、神の備えだったのではないか。それでこう言う。

「あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、このような時のためかもしれない。」「かもしれない」と訳していますが、正確には「誰がこの時ではなかったと分かるのか。いや、まさにこの時のためである。」はつきりと断言している。

それなのに、エステルが「私にはできません」と言って沈黙するならどうなるか。もちろん、神の救いがだいなしになったり、取り消されることはないかもしれない。けれども、エステルと父の家が滅ぼされるだろう。それほど大きな罰を受けることになるのだと語った。

3) 二つの疑問

ここで二つの疑問が湧いています。一つ目。モルデカイはどうしてこんな厳しい言い方をするのか。脅かしではなくて、神の真実として語っているというのなら、いったいそれはどういうことか。

二つ目。エステルの両親はエステルがまだ小さかったときに亡くなっていて、ほかに身寄りがないのでモルデカイに引き取られたのです。エステルの父の家はもうとっくにない。ところが「あなたの父の家は」と言って、「父の家」はまだあるかのような言い方をする。この二つの疑問について考える前に、まずエステルがどのように応答したのかを確認しておきます。

2 エステル

1) 決断

16節。「行って、スサにいるユダヤ人をみな集め、私のために断食してください。三日三晩、食べたり飲んだりしないようにしてください。私も私の侍女たちも、同じように断食します。そのようにしたうえで、法令に背くことですが、私は王のところへ参ります。私は、死ななければならないのでしたら死にます。」

モルデカイのことばをどう受けとめたか、エステルの気持ちは書いていない。死ぬか生きるかの決断を迫られて、苦しまないはずはない。イエスが祈ったように、「わが父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。」同じように祈ったでしょう。でも何もしないのなら自分も両親も滅ぼされてしまう。ならば道は一つしかないのです。王の前に出て行く決心をします。

もちろん全てが納得したのではない。なぜ自分なのか。理由が説明されていないからです。それはイエス・キリストの母であるマリアも同じです。あるとき突然、天使ガブリエルから、「あなたは身ごもって、男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい」と言われたことは皆さんご存じです。そのマリアはこうも言われた。「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。」でも、マリアがたどっていく歩みを振り返るなら、とても「おめでとう」と言えないような話しではない。自分の息子が十字架で苦しみ、死んでいく姿を見なければならなかった。母親として自分自身が死ぬほどのつらいところを通されていった。

2) 死ななければならないのでしたら死にます

エステルも同じです。神の救いのご計画のために選ばれたのはよいとしても、そのためにどんな道を歩まなければならないか。「法令に背くことですが、私は王のところへ参ります。」それは殺されるかもしれないと言う茨の道です。

「私は、死ななければならないのでしたら死にます。」とても簡単に言えることばではありません。仮にエステルが何も財産がなく、名誉もなく、身寄りもなく、そして生きる希望もなかったというのなら、もしかして投げやりのようにして言えるかもしれない。でもこの時、エステルは人もうらやむような富、名誉を持ち、多くの侍女や宦官に取り囲まれ、モルデカイという親身なって育ててくれた身寄りもあった。エステルは、いま王妃の冠を捨て、地上におけるすべてのものを捨て、身を飾るものをすべて捨て、ただ一人の裸の信仰者

として神の前に立たなければならなりません。なぜエステルはこのような道を歩まなければならないのでしょうか。

3 神

1) 備え

いつも繰り返しますが、すべてがわかるわけはありません。そもそも、アダムとエバのように神に逆らった罪人を、それでもなぜ神は救おうとされるのか。私たちには測り知れない。けれども、わかることはいくつかある。エステルやマリアのことを見るならば、神の救いの方法はいつも変わらないことがわかります。どんな方法か。神が人を救うとき、誰かが苦しみを通らなければならない。その方法は変わらない。

神はどんな方ですか、とときどき質問されます。もし神が冷酷な方であるなら罪人を救うはずはありません。ところが、神は苦しむ者に無関心ではおられないのです。地上に嘆き悲しむ者がいるなら、天におられる神は、いてもたってもいられなくなり、身もだえしながら悲しまれて私たちのところへ下りてこられる。そのような方です。

その救い方も、ある日思いついて行き当たりばったりで何かをなさる方でもない。私たちが生まれる前から、ずっと昔から用意周到に、少しの誤りもなく緻密な計画をもって救いの準備をされる。

2) 時

そのような神の備えがあることなど、ふだんは何も問題がないときには分かりません。でもいったん大きな問題が起きたとき、神の備えは私たちの目にはっきりと見えてくる。それがいつなのか、どんなときなのか誰も分かりません。わかることは、救いの時が延ばされたり、変更されたり、あるいはキャンセルすることはないということです。

3) 救い：モルデカイが語った神の真実

モルデカイはそのことを確信していた。そのことを頭に入れながら、さきほどの二つの疑問のことをもう一度考えます。一つ目。なぜモルデカイはこれほど厳しいことばをエステルに語ったのか。二つ目。「あなたとあなたの父の家は滅びるだろう」この意味についてです。

ここで考えなければならないことは、救いとは何かです。ユダヤ人が苦しみから逃れて平安に暮らせるようになる。もちろん、これも救いです。しか

しそれだけではない。死んだ人たちはどうなるのでしょうか。例えばエステルです。仮にエステルが王の怒りに触れて殺されたとします。もしそうなったら、エステルは神によって滅ぼされたということなのでしょう。もしそうならば、いやだと言って王の前に出なくても滅ぼされるし、ハイ行きますと言って、王の前に出ても滅ぼされることになり、踏んだり蹴ったり、呪われた人生でしかない。それはあきらかにおかしい。

ということはこうとしか考えられない。たとえ殺されてもエステルは救われ、父の家も救われる。モルデカイはそう言っている。救いとは、何か。死からのよみがえりがあるかないか、なのです。エステルが、「私は、死ななければならぬのでしたら死にます」と語るのを聞いてモルデカイはどう思っていたのか。彼は、冷酷で血も涙もない人だったのか。違う。モルデカイだってエステルにこんなことを言わせるのはつらいのです。でも神の計画であることがはっきりと分かるので、心を鬼にして言わなければならない。それが自分の役割なのだと悟った。だから悲しくて灰をかぶり、粗布を着て大声で叫ぶ。でもそれは絶望の叫びではない。今いつときは悲しいけれど、その先に神は必ず死からのよみがえりという、最終的な救いを与えてくださる。そのことを信じる。だからエステルに言えるのです。エステルの両親は死んだけれど、彼らも救いにあずかってよみがえる。

イエス・キリストが十字架で成し遂げてくださった救いのみわざとは、このような意味です。ということは、神は二千年前にすでに私たちのために救いの備えをしてくださっていたことになる。そう言われても実感はないかもしれません。でもあるとき、何か大きなことが目の前に迫ってきたとき、私たちはありありと知ることになるはず。この時のために備えてくださっていたのだ。神のひとり子がいのちを捨ててくださったのですから、これ以上の確かな保証があるのでしょうか。十字架の主を仰ぎ見ながらこの一週間も歩んで参ります。